

水仙月の四日

宮沢賢治

青空文庫

雪婆ゆきばんごは、遠くへ出かけて居おりました。

猫ねこのような耳をもち、ぼやぼやした灰いろの髪かみをした雪婆ゆきばんごは、西の山脈の、ちぢれ
たぎらぎらの雲を越こえて、遠くへでかけていたのです。

ひとりの子供が、赤い毛布けつとにくるまつて、しきりにカリメラの事を考えながら、大きな象の頭のかたちをした、雪丘ゆきおかの裾すそを、せかせかうちの方へ急いで居おりました。

(そら、新聞紙しんぶんがみを尖とがつたかたちに巻いて、ふうふうと吹ふくと、炭からまるで青火が燃える。ぼくはカリメラ鍋なべに赤砂糖を一つまみ入れて、それからザラメを一つまみ入れる。水をたして、あとはいくつくつくつと煮にるんだ。)ほんとうにもう一生けん命、こどもはカリメラのことを考えながらうちの方へ急いでいました。

お日さまは、空のずうつと遠くのすきとおったつめたいところで、まばゆい白い火を、どしどしお焚たきなさいます。

その光はまつすぐに四方に発射し、下の方に落ちて来ては、ひっそりした台地の雪を、いちめんまばゆい雪花石膏せつかせつこうの板にしました。

二疋ひきの雪狼ゆきおいのが、べろべろまつ赤な舌を吐はきながら、象の頭のかたちをした、雪丘ゆきおかの

上の方をあるいていました。こいつらは人の眼には見えないのですが、一ぺん風に狂い出すと、台地のはずれの雪の上から、すぐぼやぼやの雪雲をふんで、空をかけまわりもするのです。

「しゅ、あんまり行つていけないったら。」雪狼のうしろから白熊の毛皮の三角帽子をあみだにかぶり、顔を苹果のようにかがやかしながら、雪童子がゆっくり歩いて来ました。

雪狼どもは頭をふつてくるりとまわり、またまつ赤な舌を吐いて走りました。

「カシオピイア、

もう水仙が咲き出すぞ

おまえのガラスの水車

きつきとまわせ。」

雪童子はまつ青なそらを見あげて見えない星に叫びました。その空からは青びかりが波になってわくわくと降り、雪狼どもは、ずうつと遠くで焰のように赤い舌をべろべろ吐いています。

「しゅ、戻れつたら、しゅ、」雪童子がはねあがるようにして叱りましたら、いままで雪

にくつきり落ちていた雪童子の影法師は、ぎらつと白いひかりに変り、狼どもは耳をたてて一さんに戻ってきました。

「アンドロメダ、

あぜみの花がもう咲くぞ、

おまえのラムプのアルコホル、

しゅうしゅと噴かせ。」

雪童子は、風のように象の形の丘にのぼりました。雪には風で介殻のようなかたがつき、その頂には、一本の大きな栗の木が、美しい黄金いろのやどりぎのまりをつけて立っていました。

「とつといで。」雪童子が丘をのぼりながら云いますと、一疋の雪狼は、主人の小さな歯のちらつと光るのを見るや、ごむまりのようにいきなり木にはねあがって、その赤い実のついた小さな枝を、がちがち噛じりました。木の上でしきりに頸をまげている雪狼の影法師は、大きく長く丘の雪に落ち、枝はどうとう青い皮と、黄いろの心とをちぎられて、いまのぼってきたばかりの雪童子の足もとに落ちました。

「ありがとう。」雪童子はそれをひろいながら、白と藍いろの野はらにたっている、美し

い町をはるかにながめました。川がきらきら光って、停車場からは白い煙もあがっていました。雪童子は眼を丘のふもとに落しました。その山裾の細い雪みちを、さっきの赤毛あかけつ布とを着た子供が、一しんに山のうちの方へ急いでいるのでした。

「あいつは昨日きのう、木炭すみのそりを押して行った。砂糖を買って、じぶんだけ帰ってきたな。」雪童子はわらいながら、手にもっていたやどりぎの枝を、ぶいっとこどもになげつけました。枝はまるで弾丸たまのようにまっすぐに飛んで行って、たしかに子供の目の前に落ちました。

子供はびつくりして枝をひろって、きよろきよろあちこちを見まわしています。雪童子はわらって革かわむちを一つひゆうと鳴らしました。

すると、雲もなく研みがきあげられたような群ぐんじょう青の空から、まっ白な雪が、さぎの毛のように、いちめんに落ちてきました。それは下の平原の雪や、ビール色の日光、茶いろのひのきでできあがった、しずかな奇麗きれいな日曜日を、一そう美しくしたのです。

子どもは、やどりぎの枝をもつて、一生けん命にあるきだしました。

けれども、その立派な雪が落ち切ってしまったところから、お日さまはなんだか空の遠くの方へお移りになって、そこのお旅屋で、あのまばゆい白い火を、あたらしくお焚きなさ

れているようでした。

そして西北にしきたの方からは、少し風が吹いてきました。

もうよほど、それも冷たくなってきたのです。東の遠くの海の方では、空の仕掛けしかを外はずしたような、ちいさなカタツという音が聞え、いつかまつしろな鏡に変わってしまったお日さまの面めんを、なにかちいさなものがどんどんよこ切って行くようです。

雪童子は革むちをわきの下にはさみ、堅かたく腕うでを組み、唇くちびるを結んで、その風の吹いて来る方をじつと見ていました。狼どもも、まつすぐに首をのばして、しきりにそつちを望みました。

風はだんだん強くなり、足もとの雪は、さらさらさらうしろへ流れ、間もなく向うの山脈の頂に、ぱつと白いけむりのようなものが立ったとおもうと、もう西の方は、すっかり灰いろに暗くなりました。

雪童子の眼は、鋭すどどく燃えるように光りました。そらはすっかり白くなり、風はまるで引き裂さくよう、早くも乾かわいたこまかな雪がやって来ました。そこらはまるで灰いろの雪でいっぱいです。雪だか雲だかもわからないのです。

丘の稜かどは、もうあつちもこつちも、みんな一度に、軋きしるように切るように鳴り出しまし

た。地平線も町も、みんな暗い烟けむりの向うになつてしまい、雪童子の白い影ばかり、ぼんやりまつすぐに立っています。

その裂くような吼ほえるような風の音の中から、

「ひゆう、なにをぐずぐずしているの。さあ降らすんだよ。降らすんだよ。ひゆうひゆうひゆう、ひゆうひゆう、降らすんだよ、飛ばすんだよ、なにをぐずぐずしているの。こんなに急がしいのにさ。ひゆう、ひゆう、向うからさえわざと三人連れてきたじゃないか。さあ、降らすんだよ。ひゆう。」あやしい声こゑがきこえてきました。

雪童子はまるで電気にかかったように飛びたちました。雪婆んごがやってきたのです。

「ぱちっ、雪童子の革かわむちが鳴りました。狼おいのどもは一ぺんにはねあがりました。雪わらすは顔かほいろも青あおざめ、唇くちびるも結むすばれ、帽子も飛んでしまいました。

「ひゆう、ひゆう、さあしつかりやるんだよ。なまけちやいけないよ。ひゆう、ひゆう。さあしつかりやつてお呉くれ。今日はここらは水仙すいせんづき月の四日だよ。さあしつかりさ。ひゆう。」

雪婆んごの、ぼやぼやつめたい白髪しろがみは、雪と風とのなかで渦うずになりました。どんどんかける黒雲の間から、その尖とがった耳と、きらきら光る黄金きんの眼も見えます。

西の方の野原から連れて来られた三人の雪童子も、みんな顔いろに血の気もなく、きちつと唇を囁かんで、お互たが挨拶あいさつ拶ささえも交かわさずに、もうつづけざませわしく革むちを鳴らし行ったり来たりしました。もうどこが丘だか雪けむりだか空だかさえもわからなかつたのです。聞えるものは雪婆ゆきばんこのあちこち行ったり来たりして叫ぶ声、お互の革鞭かわむちの音、それからいまは雪の中をかけあるく九疋くひきの雪狼どもの息の音ばかり、そのなかから雪童子ゆきわらはふと、風にけされて泣いているさつきの子供の声をききました。

雪童子の瞳ひとみはちよつとおかしく燃えました。しばらくたちどまって考えていましたがいきなり烈はげしく鞭をふつてそっちへ走つたのです。

けれどもそれは方角がちがつていたらしく雪童子はずうつと南の方の黒い松山にぶつかりました。雪童子は革むちをわきにはさんで耳をすましました。

「ひゆう、ひゆう、なまけちや承知しないよ。降らすんだよ、降らすんだよ。さあ、ひゆう。今日は水仙月の四日だよ。ひゆう、ひゆう、ひゆう、ひゆうひゆう。」

そんなはげしい風や雪の声の間からすきとおるような泣声がちらつとまた聞えてきました。雪童子はまっすぐにそっちへかけて行きました。雪婆ゆきばんこのふりみだした髪が、その顔に気みわるくさわりました。峠とうげの雪の中に、赤い毛布けつとをかぶつたさつきの子が、風にか

こまれて、もう足を雪から抜けなくなつてよろよろ倒れ、雪に手をついて、起きあがろうとして泣いていたのです。

「毛布をかぶつて、うつ向けになつておいで。毛布をかぶつて、うつむけになつておいでひゆう。」雪童子は走りながら叫びました。けれどもそれは子どもにはただ風の声ときこえ、そのかたちは眼に見えなかつたのです。

「うつむけに倒れておいで。ひゆう。動いちやいけない。じきやむからけつとをかぶつて倒れておいで。」雪わらすはかけ戻りながら又叫びました。子どもはやつぱり起きあがろうとしてもがいていました。

「倒れておいで、ひゆう、だまつてうつむけに倒れておいで、今日はそんなに寒くないんだから凍えやしない。」

雪童子は、も一ど走り抜けながら叫びました。子どもは口をびくびくまげて泣きながらまた起きあがろうとしました。

「倒れているんだよ。だめだねえ。」雪童子は向うからわざとひどくつきあたって子どもを倒しました。

「ひゆう、もつとしつかりやつておくれ、なまけちやいけない。さあ、ひゆう」

雪婆んごがやってきました。その裂けたように紫むらさきな口も尖った齒もぼんやり見えました。「おや、おかしな子がいるね、そうそう、こつちへとつておしまい。水仙月の四日だもの、一人や二人とつたつていいんだよ。」

「ええ、そうです。さあ、死んでしまえ。」雪童子はわざとひどくぶつつかりながらまたそつと云いました。

「倒れているんだよ。動いちやいけない。動いちやいけないつたら。」

おいの狼どもが気がいのようにかけめぐり、黒い足は雪雲の間からちらちらしました。

「そうそう、それでいいよ。さあ、降らしておくれ。なまけちや承知しないよ。ひゆうひゆうひゆう、ひゆうひゆう。」雪婆んごは、また向うへ飛んで行きました。

子供はまた起きあがろうとしました。雪童子ゆきわらすは笑いながら、も一度ひどくつきあたりました。もうそのころは、ぼんやり暗くなつて、まだ三時にもならないに、日が暮くれるように思われたのです。こどもは力もつきて、もう起きあがろうとしませんでした。雪童子は笑いながら、手をのぼして、その赤い毛布けつとを上からすつかりかけてやりました。

「そうして睡ねむつておいで。布団ふとんをたくさんかけてあげるから。そうすれば凍えないんだよ。あしたの朝までカリメラの夢を見ておいで。」

雪わらすは同じとこを何べんもかけて、雪をたくさんごもの上にかぶせました。まもなく赤い毛布も見えなくなり、あたりとの高さも同じになってしまいました。

「あのごどもは、ぼくのやったやどりぎをもっていた。」雪童子はつぶやいて、ちよつと泣くようにしました。

「さあ、すっかり、今日は夜の二時までやすみなしだよ。ここらは水仙月の四日なんだから、やすんじやいけない。さあ、降らしておくれ。ひゆう、ひゆうひゆう、ひゆひゆう。」

雪婆んごはまた遠くの風の中で叫びました。

そして、風と雪と、ぼさぼさの灰のような雲のなかで、ほんとうに日は暮れ雪は夜じゅう降って降って降ったのです。やっと夜明けに近いころ、雪婆んごはも一度、南から北へまっすぐに馳せながら云いました。

「さあ、もうそろそろやすんでいいよ。あたしはこれからまた海の方へ行くからね、だれもついて来ないでいいよ。ゆつくりやすんでこの次の仕度をして置いておくれ。ああまあいいあんばいだった。水仙月の四日がうまく済んで。」

その眼は闇のなかでおかしく青く光り、ぼさぼさの髪を渦巻かせ口をびくびくしながら、

東の方へかけて行きました。

野はらも丘おかもほつとしたようになって、雪は青じろくひかりました。空もいつかすつかり霽はれて、桔梗ききょういろの天球には、いちめんの星座がまたたきました。

雪童子らは、めいめい自分の狼おいのをつれて、はじめてお互挨拶しました。

「ずいぶんひどかったね。」

「ああ、」

「こんどはいつ会うだろう。」

「いつだろうねえ、しかし今年中に、もう二へんぐらいのもんだろう。」

「早くいつしよに北へ帰りたいね。」

「ああ。」

「さつきこどもがひとり死んだな。」

「大丈夫だいじょうぶだよ。眠いつてるんだ。あしたあすこへぼくしるしをつけておくから。」

「ああ、もう帰ろう。夜明けまでに向うへ行かなくちゃ。」

「まあいいだろう。ぼくね、どうしてもわからない。あいつはカシオペアの三つ星だろう。みんな青い火なんだろう。それなのに、どうして火がよく燃えれば、雪をよこすんだ

ろう。」

「それはね、電気菓子とおなじだよ。そら、ぐるぐるぐるまわっているだろう。ザラメがみんな、ふわふわのお菓子になるねえ、だから火がよく燃えればいいんだよ。」

「ああ。」

「じゃ、さよなら。」

「さよなら。」

三人の雪童子は、九疋の雪狼をつれて、西の方へ帰って行きました。

まもなく東のそらが黄ばらのように光り、琥珀いろにかがやき、黄金に燃えだしました。丘も野原もあたらしい雪でいっぱいです。

雪狼どもはつかれてぐったり座っています。雪童子も雪に座ってわらいました。その頬は林檎のよう、その息は百合のようにかかりました。

ギラギラのお日さまがお登りになりました。今朝は青味がかって一そう立派です。日光は桃いろにいっぱいに流れました。雪狼は起きあがって大きく口をあき、その口からは青い焰がゆらゆらと燃えました。

「さあ、おまえたちはぼくについておいで。夜があけたから、あの子どもを起きなけあい

けない。」

雪童子は走って、あの昨日きのうの子供の埋うずまっているところへ行きました。

「さあ、ここらの雪をちらしておくれ。」

雪狼どもは、たちまち後足で、そこらの雪をけたてました。風がそれをけむりのように飛ばしました。

かんじきをはき毛皮を着た人が、村の方から急いでやってきました。

「もういいよ。」雪童子は子供の赤い毛布けつとのはじが、ちらつと雪から出たのを見て叫びました。

「お父さんが来たよ。もう眼をおさまし。」雪わらすはうしろの丘にかけあがって一本の雪けむりをたてながら叫びました。子どもはちらつとうごいたようでした。そして毛皮の人は一生けん命走ってきました。

青空文庫情報

底本：「注文の多い料理店」新潮文庫、新潮社

1990（平成2）年5月25日発行

1997（平成9）年5月10日17刷

初出：「イーハトヴ童話 注文の多い料理店」盛岡市杜陵出版部・東京光原社

1924（大正13）年12月11日

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2005年2月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

水仙月の四日

宮沢賢治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>